

關一は、地下鉄民営化と赤バス廃止をどう思うだろうか



「大阪市営地下鉄心斎橋駅プラットホーム風景」
画／一水会常任委員・日展委嘱・研水会委員・

関西水彩画会運営委員・日本美術家連盟会員
武藤 初雄

大阪市営地下鉄は、関一市長時代1933年に日本の公営交通最初の地下鉄として御堂筋線梅田～心斎橋間が開通した。心斎橋駅には当時は珍しかったエスカレーター2基も設置され、ホームも当時は1両しか運行していなかった。将来10両編成も可能な長さを有していた、その先見性が偲ばれる。関一は東京高等商業学校(現一橋大学)教授から転身し、1923年から1935年まで市長を務めた。彼は広い意味(電報・鉄道・株式取引・銀行・貿易)での「交通経済」を重視し、狭義の「交通経済」でも、当初「鉄道発展の研究」に没頭した。鉄道を「ひとびととの国民経済」の血液だとみなしたようだ。港湾開発、御堂筋と地下鉄の同時建設など大阪の都市計画の根幹部分を実現していったのもそれゆえである。また、高い家賃に苦しむ労働者の姿を知り、「健全な国民の発達は健全な家屋においてのみ行われる」と唱え、家族で住める規模の廉価な市営住宅を大正区鶴町や北区桜ノ宮など6ヶ所に1285戸造っている。

市営地下鉄は梅田～心斎橋間の開通から78年。現在、総営業キロ数は127.5km、東京について2番目である。2009年度には約289億円の黒字を確保しており、2005年度に4年ぶりに黒字決算となつて以来、毎年黒字経営が続き、累積欠損金も昨年度末で残り約52億円となった。地下鉄の黒字を市バスや赤バスに投入すれば充分補えることは明らかで、橋下府知事が唱える地下鉄民営化などは市民にとって論外。赤バスは、「通勤・通学者とは異なる日常的な移動サービス(買い物、通院、行政手続き)に対応」して「高齢者や車いす利用者にも楽に乗降できる」ことをコンセプトに導入された福祉施策であり、敬老バスもまた同様である。平松市政がすすめる路線廃止は時代に逆行するもので許せない。鉄道を「ひとびととの国民経済」の血液だとみなした往時の関一市長はどう思うだろうか。(N)